

# T A O G G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

古田武彦氏講演要旨

## 五点論証、箕子韓国を提唱

### 和田家文書の真価も力説

六月四日、文京区民センターで、多元の会発足一周年を記念して古田武彦氏の講演「東日流外三郡誌偽書説は崩壊した付・古代韓国の新発見」が行われました。以下、その要旨をご紹介します。

#### はじめに

最近のことを始めにお話したいと思います。いま世間を騒がせているオウム真理教（以下オウムと略称）のことを、マスコミに取り上げられた切り口とは違った視点で、是非言っておきたい。

あの教団を生み出したのは、明治以後、とくに戦後の日本の社会である。あちこちの人の似たような発言を聞くが、この中身はどこでも話されていらない。明治以後の社会はどういう社会であったか、それは明治憲法が示すように「天皇は神聖にして侵すべからず」その根拠は？国史の教科書に出ている「天孫降臨」、雲の上からニギノミコトが天降って

来られる。この子孫が天皇家であるから、神聖不可侵であるというのが大前提で、国家体制の基本は、天皇家の先祖は天から降って来た、という一種の超能力であったのです。それが教育の根本にされたわけです。

その根本の上に、自然科学・理科・技術系・体育系等の教育が行われた。その仕組・構造は、最近新聞で見た構造と似ていませんか。超能力を基盤・原点に、自然科学などを重視する仕組。スケールの大小はあっても、論理構造は双生児のように共通といって、違っていますでしょうか。

よく考えると、戦前に止まらない、戦後の新憲法でもやはり天皇家が中心にあり「雲から降りて来る」という話は教科書にはなくなっても、理由なしでなぜか天皇が中心になっている。「そこが空白になって、原因はカットして、結果だけはそのまま」です。それが端的な理解ですね。しかしもう一歩進んでみますと、「天孫降臨」の話が消えた訳ではないの

で、「あれは歴史事実ではない、神話だ」とされたんです。新憲法の天皇家はああいう神話をお持ちになった尊い家柄である。超能力者が先祖にいたという神話を持っている、だから新憲法を中心に据えてある……：こういう筋書きになっているのです。七世紀末までは九州の倭国、八世紀からは近畿の天皇家と、はっきり分かれている。私がこういいますと「信用できない」という人が多いのですが、中国の歴史書、『旧唐書』にははっきり書かれています。『隋書』にも阿蘇山を見なければこうは書けないように書かれています。しかし

「そんなことは信用できない」と耳を塞いでいる。あたかもオウムの信者たちが教団の行った数々の行為を「信用できない」と目も耳も塞いでいるのと同じです。

オウムの問題はまもなく解決するでしょう。しかしその母胎がそのまま根を絶たなければ第二・第三のオウムが現れることは明らかです。

#### 『和田家文書』の「偽作」問題

和田家文書の偽作問題は筆跡の点で私にとっては切り切った問題で、格別鑑定が必要なことではないのです。「寛政原本が出てくるまで待と

う」というのが私の基本的な考え方でした。しかし和田さんのお孫さんたちが「イジメ」に遭っていることを聞いて「これは捨てて置けない」ということになりました。

青森県人に二種類ある。一つは津軽藩の家老・重臣につながる人。現在でも実力を持っている人が多い。もう一つは津軽藩以前の歴史につながる人です。

和田家文書の内容は「反津軽藩」で、征服される前の安部・安藤・秋田氏以前の歴史を輝かしいものとして取り上げています。それに対し津軽藩の要路を占めた人たちの子孫は面白くないので、攻撃する側に回っている。単純化していいですよとそのような図式になっているのです。東奥日報・陸奥新報という県紙がありますが、いずれも和田家文書を攻撃するほうに回っております。それを読まされて「けしからん奴だ」「喜八郎が自分で作っているらしい」という人がいる。それを聞いた子供がイジメに走るようになります。筆跡の点で一つ申しますと、科学的な筆跡鑑定は少ない資料では断定できないのです。書風が、ある地方ある家系で似る事は当然です。一目で判るなどというのは「箱書師」の類いで、信頼に値しません。

## 『国史画帖大和桜』の問題

昭和十年に刊行された『国史画帖大和桜』という画集があります。その中のいくつかが『東日流六郡誌絵巻』の「考察図」とソックリである、これは偽作の間違った証拠として喧伝されました。確かにその絵はよく似ており、無関係とは思えません。しかしこれには陥井がありました。彼等は発表するときに、その序文を秘匿していたのです。それには「絵は我が国古今の名画より採り」と、絵が創作でないことを表明していたのです。それだけで「偽作」論は成立不可能になりました。

さらにそれらの原本を手に入れ検討した結果、大和桜と「考察図」六郡誌が共通の下絵から写されていること、しかも大和桜の方には明治以降特有の趣向付加が見られ、「考察図」六郡誌にはそれが無い、という結論に達しました。(詳しくは『新・古代学』参照)

## 『ギリシア無文』の問題

以前に和田家文書の中に非常に興味深い一節を見出しました。それは『丑寅風土記』『古代ギリシア祭文』といひまして、秋田孝季がギリ

シアの古老から『祭文』を聞取って記録したという記事があります。それ以前に「我ヒサリツクの丘に立つ」など、秋田孝季がギリシアに行った事が書かれていましたから、非常に興味を持って、それを講演会で発表したところ、古田史学の会の現会長の水野さんが「これは見覚えがあります」といわれ、岩波文庫の『ギリシア・ローマ神話』野上弥生子訳を持って来られた。一読して極めてよく似ていることは明白でした。

私は水野氏に「これは基本は筆跡問題ですから、外部に発表するのは慎重にしてください」と頼み、コピーを差し上げました。そこで水野氏は当時研究仲間(だと信じていた)斎藤隆一氏に話し、文書のコピーを送ったようです。

そして間もなく、『季刊邪馬台国』のグラビアページにそのコピーが大きく載り、安本美典氏の「このように岩波文庫から偽作していることは疑いない」というコメントが付きましました。この短いのが印象的ですね。しかし文書の扱い方はアンフェアというよりありません。

さて、問題の『祭文』と野上弥生子の『ギリシア・ローマ神話』は、  
一、両者関係あり。  
二、岩波文庫は神聖である。

三、文化勲章を貰った野上弥生子は神聖である。偽作・盗作するはずがない。

以上から和田喜八郎氏の盗作であるという結論が出る。こういう理路で組み立てられているのです。

それに対して問題点がある。一番先に、偽作でもしようとする人が、大勢の人の目に触れている岩波文庫や『大和桜』から、よく似た姿で偽作するでしょうか。考えれば解ることです。

しかしよく読んで見ると解ってきました。いくつかの点で違うところがあるのです。

### 『丑寅風土記』

心清らかに罪無く科無く  
人の世を渡るは幸なる哉  
さる人の胸を刺す復讐は  
えふれじ安らげく生命の道  
を行べしさあれ窃かに……

### 野上弥生子訳

心清らかに罪なくとがなき人は幸なるかな。さる人にはわれら復讐はえふれじ。安らかに生命の道を行べし。さあれ窃かなる……

ほとんど違うところは無いようですが、傍線の部分が『丑寅風土記』

にあって野上訳にない。しかもこのことの意味が重要なのです。前者では「うわべは清らかに罪なく生活している人の胸にも、刺すような復讐の念があるはず。でもそれは復讐の女神の関与する事ではない」という、人の心の深い暗部に立ち入った科白があるのに対し、野上訳ではこれらは綺麗にカットされています。この場合、『丑寅』から野上訳に変更するのは容易ですが、その反対は哲学的・人生論的な深い素養が必要で、凡人のできるものではありません。

(さらにもう二箇所、重要な論証があるのですが、紙面の関係で割愛します。詳しくは『新・古代学』二〇一頁を御覧ください。)

### 『和田家文書』の思想と文体

田沼意次との往復書簡があり、意次が俗説のような賄賂好きな政治家ではなく、鎖国を解消する事に尽力しようとして、反対派から陥れられた事が読み取れる。

「古老から聞き書き」 「アイヌの長老からの聞き書き」 など、現在の歴史学の学ぶべき手法がうかがえる。出雲荒神谷に矛や銅鐸を埋めたという大邑土佐守の記録があり、秋田

孝季が書写している。以上質量とも、塙保己一の『群書類従』に比して劣らぬものである。

ただし書いてあるから本当だといふのではない。文書同志の矛盾もある。『群書類従』もその点同じだが、『群書類従』の値打ちが変わるものではない。

(以下、新しい文書を発表。『新・古代学』1にも載せてないものだが、残念ながら紙面の都合で省略抄出、書目次の通り)

和田吉次書簡 北鑑六一—一九

秋田孝季書簡 享和二年(一八〇二)

火災の報告と津軽移住の意思表明  
和田末吉文書 明治一五年、排仏  
毀釈政策や神社の格付けに対し怒りを表明  
金光上人記録から親鸞関係重要記事発見、など。

### 『五論論証』

なぜ三国志の魏志倭人伝に、「女王国の東海を渡る千余里、又国あり、皆倭種、又侏儒国あり、女王(国)を去る四千余里」とあるか。投馬国のような倭国第二の大国にも里程は書かれなかったのに、一見つまらないういコビトの国になぜ、というのが今

回気がついた問題です。

結論から申しますと、倭人伝は洛陽を原点として書かれている。西晋の都は洛陽にあったのですから当然です。そして洛陽—帯方郡—邪馬壹国—侏儒国—裸国—黒齒国という、中国の東を見通したラインの上に叙述されている—これが今回気づいた命題です。ここに辿り着くまでには、帯方郡からの行路の問題、部分里程と総里程の問題が基本になって、邪馬壹国は博多湾岸であることを含み、侏儒国は足摺岬であることを含み、裸国・黒齒国が第五の原点として書かれているのです。

南米太平洋岸と日本太平洋岸に共通する縄文時代以来の寄生虫(鉤虫)の問題、S T L V 遺伝子が濃厚にアデスの原住民と日本の太平洋岸に分布する問題などが、総て一つの方向を指して実証されており、

これらによって「二倍年暦」「短里」などの正しさが更に証明されたのです。

### 『箕子韓国』のひそひそ

ニニギの詔勅、「向韓国真来通、笠沙之御前而、朝日之直刺国、夕日之日照国、故此地甚好地也」(朝日文庫『盗まれた神話』参照)

ここで「笠沙之御前」は御笠川一帯、ニニギの到着した「筑紫の日向

の高千穂のクシフル岳」は、すなわち博多と糸島郡との間の高祖山連峰、という論証を発表しました。この笠沙の御前であろうと、考えました。ここで「韓国」は、「かんこく」ではないかという問題に出会いました。この時点、おおよそBC一世紀ごろには「韓国」がすでに朝鮮半島南部に実在したのです。『三国志』および中国歴史書によりますと、箕子朝鮮というのがあった。殷末に紂王に愛想を尽かした箕子が平壤の辺に来て箕子朝鮮と名乗った。BC十

一世紀ごろです。しかしBC二世紀に滅亡する。燕から衛氏がやって来て亡命し、それが反って箕子を攻めて滅ぼしてしまった。箕子の一族が海を越えて南下し、今の韓国の西海岸の真中へん、扶余とも公州とも光州とも言われていますが、その辺に来て韓王を名乗る。それがAD二〇〇

年頃にまた滅亡する。『三国志』に「部從事呉林、楽浪の本韓国を統

ぶるを以て、辰韓八国を分割し以て楽浪に与う…臣幘沾韓忿り、帯方郡崎離營を攻む…遵戦死し、二郡遂に韓を滅す」というのがこれで、これまで四〇〇年間、現在の韓国の場所に「韓国」があった。これを私

は「箕子韓国」と呼んでいます。倭人伝の「古より以来、その使の中国に詣るや、皆自ら大夫と称す」というあの大夫も、周王朝からじかに受けたとするより、箕子韓国から習ったとしたほうが、時間的にも距離的にも近いのではないかと思えます。

「天孫降臨」は考古学者のいう「前末中初」、BC一〇〇年ごろと思われる。この時北九州では考古学遺物に大きな変動があり、文化的断絶があったことが知られています。例えば板付の水田遺構はこれ以後衰退して無くなってしまいました。稲作は

盛んになるのにです。「天孫降臨」は侵略である事は明らかで、決して超能力などではありません。

韓国は宣長以来「からくに」と読んで、私は従来これを釜山辺りに当てていたのですが、韓国といえは韓国の都である事は明らかで、現在西海岸から（光州など）三種の神器の組合わせが出土しています。「真来通り」とは三種の神器から三種の神器へのルートを二ニギは述べているのではないかというテーマが浮かんで来るのです。

（まとめ 安藤哲朗）

## HISTORIAE

# 和田家文書ノート

## 中小路駿逸



待っている。和田家文書の、活

字ではない、だれかの直筆のもの、それもいちばんもとのものを、じかにジックリ時間をかけて読める、その時節を。

なぜ、それを待つのか。この文書群は、どうやら一筋縄ではいかないもののように、そのあたりの事情を解きほぐすためには、いま見ることのできる直筆では足りない、と思うからである。

少し、説明する。

和田家文書の一つ『北鑑』の一部を、古田氏のお宅で見せていただいた。そのまた一部についてコピーを頂戴して、また読んだ。すると、こういう文句があった。

（上略）父及び先代の遺したる虫食に朽るを廃棄に忍びず茲に再書を以て遺し置きたる我が心に領念仕り夜明けたる明治進歩せし大正の御代に文語を易く綴りたり。

## 中小路駿逸氏講演会のお知らせ

▼8月20日（日）1時30分

▼シビックホール（文京区役所2階・地下鉄春日駅）

▼演題 新・古代学の景観

―万葉・宮室・大古墳―

▼講師のことば

古代学とは、何を、何のために、どういう方法で調べていくものなのか。現在、その学の世界で新たに

に起こりつつあることは何なのか。どのような小さな事実が、どれほど大きな景観と意外なつながりを持つのか。そうしたことを、文献の中の言葉と、知られている遺跡・遺構の状況との面からいくつか例示しようと思います。私たちが歴史の中でどんな位置にいるのかを知るための手がかりが提供できれば幸いです。

（中略）大正元年正月一日 和田長三郎末吉

あッ！と、思った。

「大正元年正月一日」にこの文章（『北鑑』第七巻 巻頭の「書意」）は書かれた（再書された）という体裁になっている。大正元年という年は、七月三十日に改元されて大正になったのだから、その年の正月一日の当日には、その日はまだ「明治四十五年正月一日」だったはず。なのにこの文章は「大正元年正月一日」と、さかのぼらせた表示を採用している。が、わたしが、あッ！と思ったのは、それだけの理由からではない。この文章は本文のなかに、「夜明

けたる明治」ばかりか「進歩せし大正」の文言まで含んでいる。「進歩せし大正」というのは、「明治四十五年正月一日」には常人には絶対には書けない文言である。だが書いている。なぜか。この文章を今見る形に仕立てた人物（和田長三郎末吉と名乗っている）は、明治が大正と変わればさかのぼって年号を書き改める（そのことは特に奇とすべきことではない）だけでなく、いったん「明治の御代」と書いたであろう本文に「進歩せし大正」を新たにはさみ込んで当然とする（「大正元年正月一日」に「進歩せし大正の御代」と書いた形になるのを気にしない）人物なの

である。本文中には「文語を易く綴り」という文言もある。どうやら「文語（古文）を口語（ないし現代語）に直す」という意味ではなく、「原本もしくは親本の文中の表記やことばづかいを、自分が理解している範囲内で、現代にマッチし「かつ「易し」と思っている形に、書き改める」という意味らしい。ともかくこの筆者は、「ここに書くのは一字一句もとの本の通りだ」とは言わず、逆に「もとのものは違えたぞ」と、昂然と宣言しているわけである。そして現に、日付の表記を改めたり、「大正の現代に合致する」一句を書き加えたりしているのである。古田氏は和田家文書の性格を「累代の書き継ぎ文書」と規定された。（新・古代学第一集四三、四四ページ）。その性格のあらわれの一端に、このとき私は触れたのだ。これが「限りなく、現代に適合する」形に、書き換え・書き足し・書き直しを加えられる」性格のものだと気づく、という形で。

こここのところに気づいて、私は「あッ、これは一つの「文化」だ！」と思ったのである。「そうか、こういう「文化」があったのだ！」それがこの驚きの内容である。一種の

カルチャー・ショックだ。考えて見ればこういうのは、あったって別に不思議のないものなのだが、そのことについて気づかないでいて、いま、あらためて気づいた。自分の置かれたこの状況に、何ともいえぬ「おかしみ」が感じられた。笑いが止まらなくなり、たいへん愉快な気分になった。

ここまでの話を、あちこちで少しづつ人に言ってみたら、ある人は「じゃ、やっぱりニセモノだ」という反応を示した。私は逆なのだ。止まらぬ笑いの中で、私は「これは軽々しく偽書などと言えるものではない。一筋縄ではいかぬものだ。親本、原本といったものつき合わせてみなければ、話にも何にもなりはせぬ」と感じとっていた。この「発見」と、そこに得られた「心証」とが、私を笑わせ、愉快にさせたのである。なお言え、ば、「異本、ないし本文の文面の変化は、誤写だけによって生じるものではない。」という、たいへん大事なことにもつながるものを、この事態は含んでいるのである。

か、おわかり願えようか。「七たび尋ねて人を疑え」ということもある。無実の人を断罪する危険こそ、まず恐るべきもの。が、それだけではない。本文中に「門外不出を心得、亦他見を無用として」の文句がある。筆者は不特定多数の世人に読まれることを予期してない。予期された読者はごく少数の子孫の範囲に限られよう。その少数をあざむいてどうなるというのであろう。さらにまたこの筆者は、原本・親本の表記や言葉遣いまで変えたと読者に思わせるといふ、ある面から見れば自己にとって極めて不利な証言をしているのである。こういう事態からただちに、ウソだ、偽作だ、という心証を得るのは無理ではなからうか。

が、万事はこれからのこと。それよりも、さしあたって大事なことを言おう。

この文章を書きつつあるとき、一九九五（平成七）年七月七日、朝日新聞の夕刊の第一面に、こんな記事が写真入りで出た。私がかつて十五年勤めていた愛媛大学の構内（このあたり、弥生時代の集落遺跡がある）で私が関西の方にかわった直後、工事に伴う発掘作業の中で、「宮室」と理解すべき柱

穴の列（コの字型）が出たのだが、一世紀にはそのような大建築はなかったという当時の考古学界の通念のために話題にもならず、記録にとどめられただけで埋め戻されていたことがわかった、という。

通念（考えの枠組み）に合わぬものに出会ったときが運命の分かれ目である。通念に従ってしかるべく（ウソだ、ニセモノだと思ふことにするとか、記録にはとどめておいて無視することにするとかして）処理するか、事実をひとまじ「あッ、そうなのか！」と受けとめるかである。私は予期せぬ一つの「文化」に出会った、と受けとめて愉快になって、笑った。この受けとめ方が合っているか違っているか、やがてわかる日が来るであろう。なすべきことは他にも多い。あせらず、愉快に、笑いながら待つことにする。

雑誌「新・古代学」第一号が、和田家文書偽書説を無効、虚妄とする古田氏の反論を載せて発行されたのにちなんで、現在の思いの一端を申し述べた。

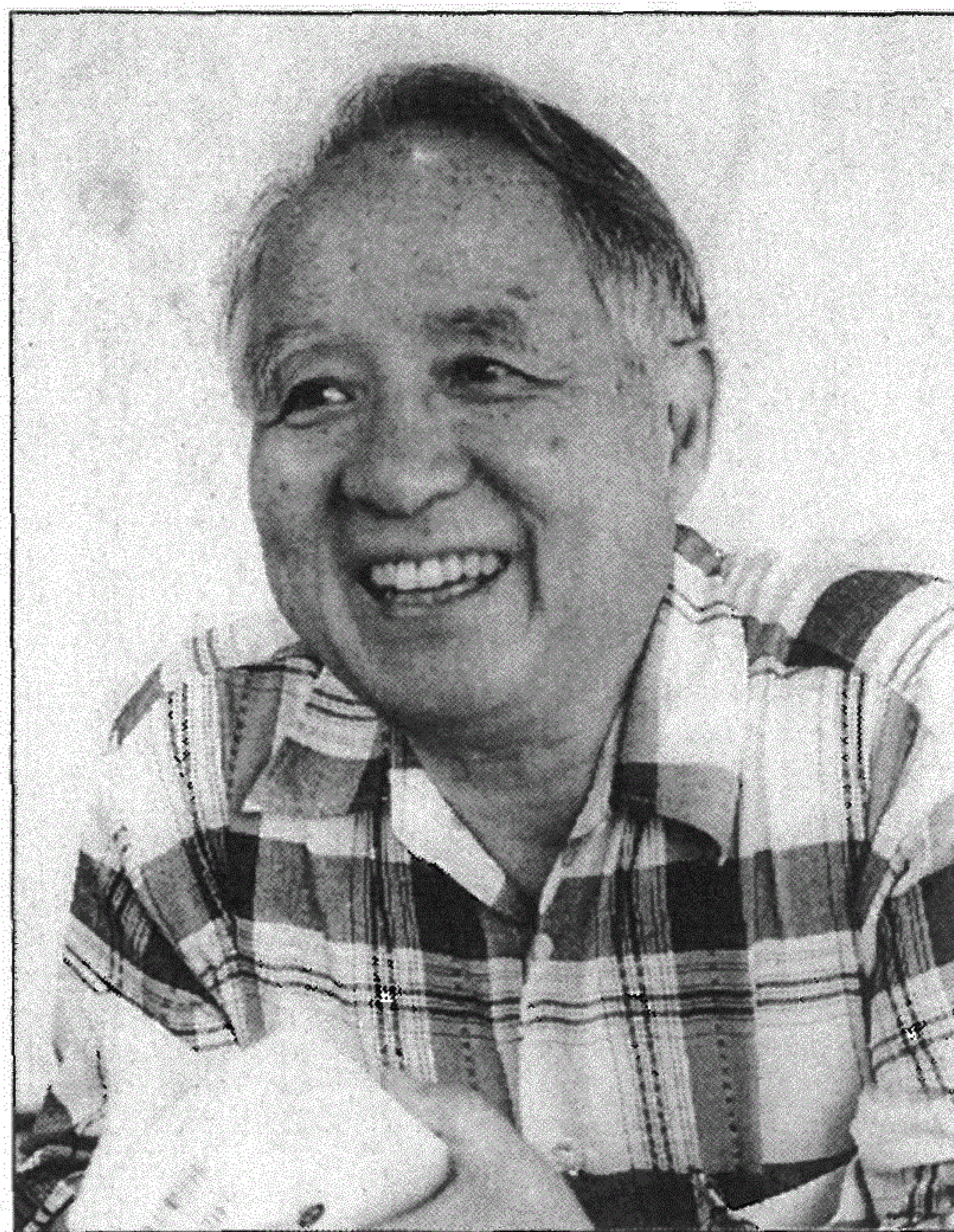
（一九九五年七月九日）



山田宗睦

日本書紀講座

第十二回



講義中の山田宗睦氏

## 大和とは無関係な「神代巻」

今月も第六の一書の続きである。古事記と最もよく似ているとされる一書だが、イザナキがイザナミを離縁し、褌をするために身に付けているものを次々に放り出すところは同じである。しかし、第六の一書の叙述は錯綜しており、古事記より分かりにくい。杖、帯、衣、禪、履からそれぞれ神々が誕生するが、その関連も理解しづらいものが多い。こうした衣服はいつの時代のものだろうか。史料から衣服を解明した研究に武田佐知子「古代国家の形成と衣服制」があるが、それによると庶民は奈良時代も貫頭衣を着ていたとい

う。この注釈が禪をハカマと読ませているのは疑問で、この描写は大寶律令当時ではないか。（そこで文章を並べ変えて原型に戻すことを宿題にされた。褌をするのにどういう順序で体を動かすかを考えればよいのではないか）

イザナキは筑紫の日向の橘の小戸のアワキハラで褌をするが、五段の地名はなく、アワキハラは不詳というほかない。吉武遺跡と関係がありはしないかと思っている。褌からも次々に神々が誕生する。ツツノヲノミコト群が住吉の大神、ワタツミノミコト群が阿曇族の祭る神となる。

阿曇族は非常に魅力的な氏族で全国に散らばって行くが、信州の穂高という山中にまで進出している。本拠地は志賀島。住吉神社といえ、大阪を思い浮かべるが、元来は博多湾岸の神で、現在の博多駅近くにいた土着の勢力が祭っていた。小戸という地名も福岡市に残っており、志賀島、住吉と並べるとちょうど三角ベースになる。褌の場面は非常に重要であると思っているが、すべて北九州の話であることに改めて注目したい。神代巻は大和とは何の関係もないのである。

### スサノヲの実像は？

さて、アマテラス、ツクヨミ、スサノヲ三神の登場である。アマテラスはイザナキの左の眼から、ツクヨミは右の眼から、スサノヲは鼻から誕生する。イザナキは、「アマテラスは高天原を、ツクヨミは蒼海原を、スサノヲは天下を治めるべし」と。三神の分治には五種の伝承があるが、スサノヲの治める所は資料によりバラバラである。スサノヲは元来、三神の一つとして存在しなかったのではないか。アマ、ツキに対しスサは地名に過ぎず、その土地の支配者であったものが、神話に押し込

まれたと考えられる。スサノヲは根の国に行きたい、母恋しと泣き叫ぶ。イザナキには面白いはずがない。勝手しろ、と突放す。スサノヲの話は日本の神話における物語の原型ではないか。文芸的な存在であったものが歴史の中に押し込まれたため、矛盾も出てくるといえるのではないか。日本には異類婚姻譚の流れがあり、しかも古代にとどまらない。有名な葛の葉もそうだが、動物がヒトの男と結婚する、やがて男の裏切り、父母離婚、子は父の許に、そして子は父を憎み、母を恋しがるといふパターンである。スサノヲとはこうした存在ではなかったか。

なるほど、いつものように明快な説明である。私としては本論とは少し外れるが、褌の所で神武の北九州出發説を示唆されたことが印象に残った。また、古事記と似ていることが共通の原資料からの採録を意味するのだろうか。これには梅沢伊勢三氏などの先行研究があるようなので、遅ればせながら自分で当たってみようと思った次第である。（木村由紀雄・記）

▼第十二回 9月10日（日） 1時半～  
文京区民センター（八月は休講です）

## 『イリアス』、ポウプ、孝季

上林昌太郎

『丑寅風土記』所載の「古代ギリシア祭文」中の一、二、と酷似する、T. Bulfinch, *The Age of Fable* の野上

弥生子による抄訳『ギリシア・ローマ神話』(岩波文庫) 263、286頁の二訳文について祭文先、弥生子後とみなすのが自然であることは、既に古田武彦氏によって充文示された『ギリシア祭文の反証』(『新・古代学』第一集)。即ち、筆跡に関わる論拠の他に、(1)微妙に異なる場合、祭文の方がより口当りの悪い文面となっている(従って、「祭文→弥生子」の改変は有り得ても、逆は有り難い)、(2)弥生子訳中、右の二訳文が文語の名訳として異様に浮き出ている(水野孝夫氏が両者の酷似に気付かれたのもその故であろう)、(3)大正年間に『丑寅』が福沢家、三田同人に貸し出されており、弥生子はこのルートによって祭文を見たことと推し得る、の三点に集約される論拠によってである。

で、当たった結果気付いたこと、また、このことから推理し得たことを左に述べる。

『イリアス』の原文については、例えば松平千秋訳「父神ゼウスよ、どうかアカイアの子らを、霧の中から救い出して下さい、空を明るく眼の見えるようにしていただきたい。光の中でなら殺して下さいでも厭いません、どうやらそのおつもりでおいでのようですから」(岩波文庫『イリアス(下)』187頁)が正確な訳である(ただし、松平氏は647行の接続詞 *epoi* を「理由」に取っている。「場合」と取るなら、「どうやら」の部分「そのおつもりでおいでの場合には」となる。語学的には、いずれも可能である)これと祭文を比較されたい。両者が同一の文章の訳文とは到底思えまい。それはいつに、『イリアス』のポウプ訳なるものが、原文の忠実な翻訳では全くなく、むしろ、原文を下敷にした創作と称すべきであるからである(ブルフィンチが併載しているクーパ訳の方は、ほぼ原文に即した訳である)。このあたりの消息については、例えば

漱石の『文学評論』第五編を見られたい。ポウプが『イリアス』の翻訳のおかげで「金を作って一生安楽に暮らすことの出来た」こと、しかしながら、「二世の碩学として当時全欧から尊敬を受けていた Bentley から、「貴方の翻訳……は中々結構だ。だがホームー<sup>イカ</sup>ぢや無いやうだ、然う呼ぶのは不可<sup>イカ</sup>んね」と評されたことが誌されている。(なお、『文学論』第一編第二章「怒」の冒頭に引かれた『イリアス』劈頭のポウプ訳を右の松平訳と比較すると、ポウプ訳と原文との距離のもう一つの例証が得られる。)

以上からの結論。祭文末尾に「ギリシア古老より拝聞した」とあるが、古老が暗唱したか読み上げたかした『イリアス』の二行をそのまま訳出する語学力を孝季(達)は持ち合わせていなかった。そこで古老に拝聞したのが何のどの箇所か確認した上で、当時流布していたポウプ訳から訳出した。(ポウプの訳業は一七二〇年に完了していたから、天明年間(一七八一〜八九)の孝季の拝聞に充分間に合う。)

古田氏は、孝季、ポウプがそれから訳出した、現行のテキストとは大幅に相違する別写本の存在の可能性、あるいは孝季が原文を参照して

ポウプに手を加えた可能性を探りたいうようであるが、いずれも有り得ない。先ず、これほどの異本が、例えばオクスファードのテキストの校異に影も形も示していないはずがない。従って第一の可能性は否定される。とするなら、孝季はポウプを訳したという以外なくなる。原文を参照してポウプに手を加えるほどのギリシア語読解能力があったのなら、そもそも何故ポウプを訳さねばならなかったのか。従って第二の可能性も否定される(「それもよし」の一句がどうしても気になるなら孝季は三回もギリシアに赴いた由であるから、「古代ギリシアの神観についてその間に得た知識が反映した」などと説明すべきであろう)。古典ギリシア語は欧米人にとっても習得するに難しい言語である(ラテン語の方は、われわれにとつての古文・漢文のような位置にある)。天明の孝季を万能の天才に仕立てあげる必要はない。

最後に一言。とするなら、記録魔孝季が何故ポウプ訳からの重訳である旨を誌さなかったか、気に掛かる。これについては、「孝季の原本が一度焼失したことによって説明できるかもしれない」との古田氏の示唆をお伝えしておく。

(筆者 東金市在住 会員)



# 弥生中期の 金属溶炉など

## 95年前半の 遺跡発掘の動向

一九九五年もまた、全国で遺跡発掘のニュースが相次いでいる。文化庁は「新発見考古速報展95」を開催（東京国立博物館は六月二十日～七月二三日、以後、上越市、山形市、八戸市、福岡市、沖縄・浦添市、姫路市の順に開催）する予定であるが、東京会場は盛況であった。旧石器から近代まで（一番新しいものは、東京・旧新橋駅跡遺跡）、話題を呼んだものの出土物が展示された。旧石器では五十万年前という判定がでた宮城県高森遺跡、縄文では何といても青森市三内丸山遺跡、弥生では「一支国」の中心と推定される巻岐島原ノ辻遺跡、古墳時代では卑弥呼が魏からもらった可能性が指摘される「青龍三年」と刻まれた鏡が出土した京都府大田南五号墳、古代では法隆寺と同時代の彩色壁画の存在が確認された鳥取県上淀廃寺跡、奥州藤原氏の政庁と断定された岩手県柳之御所遺跡などに注目が集まった。

ただ、これらは九四年末あたりまでに報道された発掘ニュースであり、必ずしも最新というわけではない。

そこで、今年前半新聞紙上で報道された発掘ニュースの中から主なものについて、振り返ってみたい。九州地区では、福岡県添田町の庄原遺跡から弥生中期前半（BC二世紀）の金属溶炉が出土、製鉄炉の可能性が高いと判断された。これまで最古の製鉄炉とされてきた広島県子丸遺跡より四百年も古いことになる。弥生の鉄器は北九州が中心であり、弥生製鉄説を裏付けるものでもある。近畿地区では、①大阪府池上曾根遺跡の高床式建物跡、井戸跡、②滋賀県伊勢遺跡の方形区画、が「邪馬台国」論争に波紋を投じた。報じられた。もちろん、近畿説に有利、九州説に水をさすものとして、である。近年、九州で大型の建物跡が続々出土しており「邪馬台国」九州説へ流れが傾き始めた感があったが、近畿でも九州に匹敵する遺跡が出たことで、それに歯止めをかけることになるかと理解されているようだ。しかし、池上曾根遺跡の建物跡から50m見当離れた場所からは、以前に破砕された銅鐸が出土していると聞く。大型建物跡の出土を直ちに、銅鐸と無縁である「邪馬台国」に結

びつけることはできない。一方、③従来から卑弥呼の墓の有力候補とされてきた奈良県箸墓古墳から出土した土器類は同古墳が三世紀後半の築造であることを示すことが報道された。箸墓古墳は卑弥呼ではなく、壹与の時代だといっているのである。

後代では、飛鳥浄御原宮推定地から出土した木簡に「調」「大丁少丁」など租税文字が記されていたことが分かった。天武天皇時代と見られることから、大宝律令制定より二十年も前に租税制度が実施されていたことを示すものと考えられる。律令制度の成立過程についての重要資料になるものとされる。

東海地区では、愛知県西上免遺跡で前方後方墳が発見された。三世紀半ばとみられ、これまで確認されている前方後方墳の中では最も古く、規模も最大級と判断される。前方後方墳の起源も従来は畿内と考えられてきたがこの発見によってその起源は東海地区で、そこに一大勢力が存在したことを示すのではないかとの見方も出てきた。

関東地区では、新たな出土ではないが、あまりにも有名な弥生式土器の元祖、弥生町式が実は弥生時代のものではない、との説が出てきたと報じられた。近年、土器編年や時代

区分の研究が進んでいるが、その結果、弥生町式は古墳時代のもの、少なくとも弥生時代から古墳時代への過渡期のものとみる見方が台頭してきている。古墳時代の始まりも四世紀からというこれまでの定説が揺らいでいることとあわせ、見逃せない問題といえよう。（木村由紀雄）

## 『新・古代学』を読んで

神奈川 神山 功

これほど『東日流外三郡誌』偽書説派の人々の攻撃がすさまじいものであったとは、誰が予想したでしょうか。「宝剣額偽造説」「大和桜模倣説」「ギリシア祭文偽作説」のすべてが、余りにも根拠のない、いわれなき攻撃であったことに驚かざるを得ません。あのような薄弱な根拠で人を陥めようとする意図が私には分かりません。恐らくは、オウム真理教が金と権力に目が眩んだように、偽書説派の人々は魔物に憑かれたのに違いありません。しかし、結局、私は人間性の問題だと思えます。古田武彦先生が和田家のお子さんのいじめ防止のために反論を開始され、また、詐欺師まがいの桐原氏の子、A子ちゃんを傷つけないよう配慮されていることに心を打たれました。



たろん  
サロン

多論  
些論

消えた古代大直線道路

小金井市 斎藤聖喜代

近年古代直進道路の発掘が相次いでいる。それは江戸時代の東海道から思うと信じられないような道幅で、幅6m(二丈)9m(三丈)12m(四丈)とあり、地形を無視して直進している。道路幅は古代道の両側にある水はけのための側溝でわかる。それらは、おおむね七世紀後半頃造られ、八世紀末から九世紀にかけて廃棄されたり縮小されたりしている。

94年八月二七日に行われた木下良氏の講演会「古代道の実態」のレジメに駅制と伝制の説明があり、「駅制」は駅馬をハユマと呼んだように、本来は緊急通信のための制度で、目的地に最短距離をとるように直線的路線をとって造成され、道幅は9m(三丈)13mあった。現代の高速道路と対比、軍用道路としての性格もあつたのではないかとしている。軍用道路は広ければ広いほど有効であるとも言っている。なるほど駅馬(ハユマ)だけには幅12mは広すぎる。また駅

家は自然集落をそのまま利用したものでなく、30里間隔を基準とした。これも軍隊の駐屯地とすれば、納得。「伝制」は中央から地方へ旅行する官人のために置かれた伝馬(ツタワリウマ)は一律に五疋を郡家に置き、使用には伝符の提示を要し、郡家間を連絡する従来から存在した道路を改良整備、道幅は6m以下であつた。

【古代道の発掘事例】  
レジメより抜粋 (順不同)

- 1) 大阪府高槻市嶋上郡衙 幅10m 13m 七世紀後半から八世紀初頭に敷設。九世紀後半頃幅5mに縮小。
- 2) 兵庫県赤穂郡上郡町 約10m幅 道路と駅家 八世紀後半以降は東北300mに移転。駅家は七世紀後半から八世紀中頃まであつた。
- 3) 群馬県境町・新田町 幅13m 八世紀末に廃棄。
- 4) 群馬県高崎市情報団地 幅9m 八世紀末に廃棄。
- 5) 群馬県藤岡市栗栖寺前 幅6m 九世紀に側溝が埋没。
- 6) 栃木県南那須町 將軍道 九世紀初は幅6m 八世紀(九世紀後半、四層の路面他。幅不明。 栃木県国分寺町・南河内町 幅12m

- 7) 東京都国分寺市・府中市 幅12mと、埼玉県所沢市東の上 幅12mは連続しているとみられる。六五〇(六七五年頃築造。八世紀後半廃棄。
- 8) 静岡県曲金遺跡 幅12m 側溝から出土している遺物は八世紀後半から九世紀にかけてのもの。
- 9) 富山県小矢部市桜町遺跡 幅6m 周辺の建築遺構 七(九世紀
- 10) 佐賀県吉野ヶ里 幅8(16m 奈良時代に使用、平安時代には続かない。

以上の木下良氏の見解は、八世紀末から九世紀初にかけて、駅路と伝路の統合整理した理由と九世紀に廃棄された理由を、共に中央集権的な律令制が変容したためとしている。NHKエンタープライズがイギリスのBBCなどと共同制作した「大モンゴル」を例にとると、少数の草原の民が多民族を支配し続けるには、まず各民族の地に派遣された支配者の部下が、その長となり、反乱を逸早くみつけ、狼煙で草原の本部に知らせる。そして草原にいる本部隊が大部隊を割いて反乱国へ馬で疾走させる。この場合出発地から大部分がモンゴルの草原なので、長い道はいらない。草原が終った所から

道は始まる。これが秦の始皇帝の場合、支配のため直道を造ったり万里の長城を造ったりした。大帝國を一気に造った場合はこんなものだろう。日本の大直線道路も、大陸と同じ小国が、多数国支配のため、反乱の連絡と鎮圧の軍隊出動の時のために造ったと思う。

余談だが『日本書紀』で神武が龍田に來た時「路が狭く峻しくて人が並んで行くことができない」とあり、軍隊はやはり広い道でないとダメな事が書いてある。

駅路が軍用道路だとしたら、七世紀後半から八世紀後半まで、軍用道路が必要だったという事である。皆さんはこの戦い、何だと思われませんか。私は九州朝廷と大和朝廷の交替(七世紀末から八世紀初)後の各地の混乱を抑える戦いであつたように思う。山沢に亡命して軍器(七〇七年)禁書(七〇八年)兵器(七一九年)を挾藏している軍がいる頃、各地方にも大和朝廷に従わずに、九州朝廷に忠誠を誓っている勢力が多数あつた。それらに睨みをきかせるための軍隊の派遣が八世紀後半から九世紀にかけて、いらなくなった。つまり混乱が收拾した。そして大直線道路と駅家の大部分が不要になり、縮小して生活道路となつたり、廃棄

された。私はそのように思うのだが、  
どうであろうか。

道路造りと保全是戦いのない日に  
兵隊が毎日の日課としてやる。第二  
次大戦でも多数の兵士は塹壕掘りに  
明け暮れた。兵士がいなくなれば、  
道は必然的に縮小されるか廃棄され  
る運命が待っている。古代道の発掘  
十例がそのように物語っているよう  
に思える。七九四年の平安京遷都は  
大和朝廷にとっての平安が訪れた事  
に因んだ命名かも知れない。

#### 参考文献

- 1) 『古代道の実態』―近年の調査結  
果から― 副題・世界史上に共通  
する「直進する大道の発見」 木下  
良講演会レジメ 一九九四年八月  
二七日 豊島区勤労福祉会館
- 2) 古代日本史最前線 文芸春秋編  
文春文庫ビジュアル版 松尾光
- 3) 日本古代史「謎」の最前線 別冊  
歴史読本 木下良・前田晴人・大  
脇潔・及川司

### 九州年号の発見

小金井市 鴨下武之

新発見ではありません。  
小生として初めて、それも身近な  
ところで見つけたということ。

菱沼勇著「武蔵の古社」の「秩父  
神社」のところで、当社の創建を裏  
付ける棟札を紹介しています。

「当社開基者仁王三十代 欽明天皇  
御宇 明要六年丙寅奉祝 以而來  
今天正廿年壬辰一千四百十六年也」  
明確に明要六年とあります。

「秩父神社」に問い合わせると、  
埼玉文庫第二巻に写真があるとの回  
答がありました。写真は表面のみ  
で、明要が出ていないのは裏面なので、  
記事で紹介してあるだけでした。

「古代の市民」十一集に齊藤隆一  
氏作成の「九州年号目録」があり、  
それに「秩父神社」は登録されてい  
たので、いささかがっかりです。  
しかし、多元第五号に大内道子氏  
が紹介されている「定居」は目録に  
もないものです。

### お便り

◎福岡市下田真実氏より、  
考古学の炭素放射能年代  
テストの問題について、  
故吉岡金市博士の、先駆  
的な業績をお知らせいただきまし  
た。

◎岩手県善慶寺住職三浦恵伸氏よ  
り、安倍、安東家の菩提寺の創設  
のため努力している旨のお便りを  
いただきました。御健闘を祈りま  
す。

## 定例活動の報告

### 発表と懇談の会

古田氏は6月4日の講演会で「箕  
子韓国」の存在について提唱された。  
(一面講演録参照) 安藤哲朗さんが  
それにふれて「箕子韓国に対する覚  
書」と題して報告をした。

まず『邪馬一國への道標』の「殷  
の箕子は倭人を知っていた」の概要  
説明の後、

- 1 『史記』朝鮮列伝は箕子朝鮮の存  
在を認めていない。
  - 2 『史記』殷本紀には箕子が朝鮮に  
封じられた記事はない。
  - 3 『漢書』朝鮮伝は『史記』朝鮮列  
伝をなぞったと思われる。
  - 4 『漢書』地理志では、燕地の部  
に「殷の道衰へ、箕子去りて朝鮮  
に之く、其民教ふるに礼儀を以て  
し……」の有名な部分が出てくる。
  - 5 『史記』宋微子世家では、箕子  
を「五行」の周武王への伝授者と  
してある。そして「是に於て武王  
乃ち箕子を朝鮮に封じ而して臣と  
せざる也」の一文がある。
- 以下『三国志』『三國遺事』にふ  
れて中間報告とした。「五行」の伝

授者としての箕子の姿は興味深い。  
続報を期待したい。(富永長三)

### 万葉集と漢文を読む会

「人妻と何故(あぜ) か其を言は  
む然(しか)らばか隣の衣(きぬ)  
を借りて着なはも」

これは据膳の歌だね。いや、女性  
にこう迫ってもらいたいという男の  
願望の歌だろう。通い婚の時代に人  
妻を歌うのは何故かね。等々、いつ  
もながらにぎやかな風景である。

「植竹の本さへ響(とよ)み出で  
て往なば何方(いづし) 向きてか妹  
が嘆かむ」

植えた竹の根もとまで響かせるよ  
うな大騒ぎをして―尋常でない別れ  
―あとに残された妹の嘆き。

つい五十年前そのような別れがあ  
った。それを聞かされ、あるいは体  
験して来たわが熟年の面々は、鋭い  
視点でこの歌にせまる。

植竹とは矢竹ではないのか、等。  
東歌には「防人歌」として五首が  
収載されている。そのほかに防人に  
係わる歌と見られるものを、数首か  
ら十数首、諸注釈はあげている。し

# 古田武彦コーナー

かし東歌の「防人歌」とそれ以外の防人歌とみられる歌の関係、あるいは巻二十の「防人歌」の関係をどう解釈すればいいのか、解明されてはいない。それらはONラインを根底に据え、多元史観という物差しを駆使した時、明らかになってくるのではなからうか。

「梁書」は倭伝の前半を読んだ。

「倭、自ら云う、太伯の後なり」と確言する。また行程記事も（三国志と違い）直線に記す。さらに「獣あり牛に如（に）たり、山鼠と名づく、また大蛇ありて此獣を呑む。蛇皮堅くして研るべからず。其の上に孔有り、乍ち開き乍ち閉づ」と荒唐無稽とみえる記事がある。この記事がどこから引かれたのか、あるいは創作

このコーナーは古田氏の情報をお知らせする「コーナー」です。

## ◆新聞・雑誌

産経・書評欄 毎月2回火曜日朝刊  
「古田武彦が読む」『筑紫哲也のこの「くに」のゆくえ』筑紫哲也著（7月4日付）  
『東北の時代』西沢潤一著（6月20日付）

【陶磁郎】季刊 「安東水軍の夢の跡」双葉社1800円

TEL 03 (5261) 4818

なのか。倭伝の後に続く文身国伝・大漢国伝・扶桑国伝は前史にみえない。これらのユニークな記事こそ『梁書』のおもしろさなのかも知れない。これらをどう読み解くのか、これからの楽しみである。（富永長三）

## 関東史跡散歩の会

—真間の手児奈の

故郷をたずねて—に参加して「みんなと一緒だから行けるんだ。」そんな声がどこからともなく聴こえてきた。6月18日（日）晴、午前10時、市川考古博物館集合、高田会長始め男女14名参加による千葉県市川市内の史跡散歩の出発です。まずは博物館見学。向かいの堀之内貝

## 『司法書士』月刊「古田武彦の古

代史ノート」日本司法書士連合会・広報課 TEL 03 (335) 4191

## ◆講演会

8月6日（日）札幌  
古田史学の会 TEL 011 (76) 9010

8月27日（日）大阪  
古田史学の会 天満研修センター  
TEL 075 (251) 157

1

塚を始め近隣の出土品を見学。誰かが、「両国橋は下総国と武蔵国を結ぶ橋でこの名がある」と教えてくれた。一つ物知りになりました。

次にバスに乗って国分寺に向かう。昼食を済ましてから大きな木立ちに囲まれた国分寺を見学、近くに下総国分尼寺跡もあり、金堂・講堂跡が公園緑地になっています。西方には下総総社跡、国府の正確な位置は不明であるが、国府台のこのあたりとされています。法皇塚古墳、国府神社、弘法寺を見学後、真間の継橋。奈良時代にはこの辺は入江だったとか。手児奈をまつる手児奈霊堂、

真間の井も近くです。手児奈は多くの男性に求婚されたが、結局世を偲んで入江に身を投げたと伝えられる美女です。東に行くと南関東の弥生式土器の最古に位置づけられる須和田遺跡があります。最後は六所神社へ。帰りは真間川沿いに心地よい川風を受けながら、午後4時20分、京成線・市川真間駅近くで解散。次回も楽しい史跡巡りをお願いいたします。皆さんも気軽に参加してみてください。いかがですか。（荒井敏夫）

\*なお、このほかに網島正嗣さん、岩田一雄さんよりも、感想のお便りをいただきました。

## 古田武彦ゼミナール

「これが問題の和田喜八郎さんの字です。上にあるでしょう（これは私の字である）」と。ご本人のお墨付です。目の前で書いてもらいました。さっきまでの字とはずいぶん違ってしまう。今まで見てきた孝季や吉次、末吉や長作の字とは違いますね、実物を見れば、喜八郎さんの字ではないことがはつきりしますね。」

今回は多数の写本をスライドで見ながら古田先生の解説であった。なかでも庄巻は、「偽作」派の人たちが和田喜八郎氏の自筆の原稿と称し、雑誌に掲載したものが、実はお嬢さんの筆跡であった、という問題だ。（『新・古代学』1号参照）「偽作」派はこの原稿をアンモラルな方法で入手した故もあってか、筆者の本人確認という基本的な手続きをしなかった。このような杜撰な根拠をもとに筆跡鑑定と称し、「偽作」説を公言している。愚かなことだ。

さて当ゼミナールでは、『東日流外三郡誌』の一部を高田さんの朗読を聞きながら討論している。目で読むだけでなく、耳で聞く『東日流外三郡誌』、その名調子をお楽しみ下さい。ご希望の方は予めご連絡の上ご参加下さい。（富永長三）

# 第一回定期大会の報告

本会発足より一周年を迎え、6月4日午前十一時より、文京区民センターにおいて、第一回定期大会が開催されました。

木村由紀雄氏を議長に選出し、次の議案が提案され、審議の結果、賛成多数で承認されました。

(1) 昨年度活動報告及新年度活動計画 事務局の下山昌孝より説明

(2) 会計報告 吉田博茂より報告(別紙参照)

(3) 新年度予算案 富永長三より説明(別紙参照)

(4) 新年度役員選出(会長に高田かつ子、副会長に安藤哲朗)

なお多元的古代研究会・九州の会代表幹

旅 ●十月二九〜三〇日「多元的古代研

事 兼川晋氏より祝辞と励ましの言葉を頂きました。

## 平成六年度活動報告

平成六年度には、定期的活動として、発表と懇談の会七回、万葉集と漢文を読む会十一回、日本書紀講座十回、幹事会十回を開催し、更に会報「多元」を創刊号から六号まで発行しました。

特別行事としては、次の様に講演会、遺跡巡りの旅等を実施しました。

●五月二日/設立大会及古田武彦氏講演会

●七月二日/中小路駿逸氏講演会

●七月一六〜一七日/「多元的古代研究会」関東・関西・九州第一回連絡会

●十月九〜十日/古田武彦氏と行く信州縄文の旅

●十月二九〜三〇日「多元的古代研

究会」関東・関西・九州第二回連絡会

一月一五日/古田武彦氏講演会

● なお二月より、古田武彦ゼミナールを、隔月開催(金曜日夜)で開始しました。

## 平成七年度活動計画

平成七年度は、定期的活動として、発表と懇談の会、万葉集と漢文を読む会、日本書紀講座(八回)、幹事会(毎月)、古田ゼミナール(五回)を予定し、会報「多元」を隔月で発行します。

特別行事としては次を予定しています。

六月四日(文京区民センター)

第一回定期大会及古田武彦氏講演会

七月初旬 新雑誌「新・古代学」発行

(友好団体との共同編集による)

七月二八〜三〇日 青森遺跡巡りの旅

(講師 古田武彦氏)

八月二〇日(シビックホール)文京区役

所) 中小路駿逸氏講演会

平成八年一月 古田武彦氏講演会

なお関東史跡散歩の会は、随時計画し、その都度会報で案内します。

## 平成七年度役員及び幹事

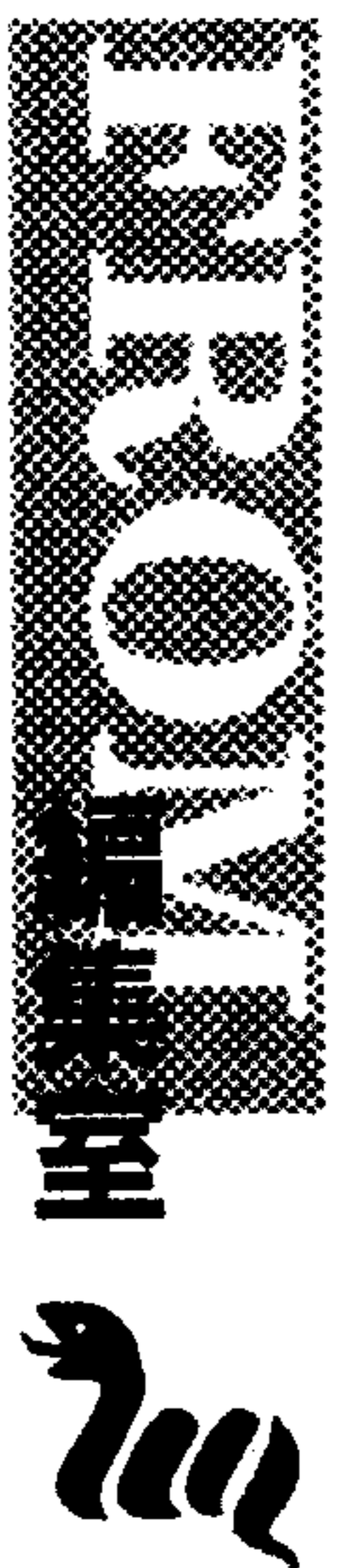
大会で選出された会長高田かつ子、副会長安藤哲朗の他、会長指名による次の幹事が幹事会を構成し運営に当たります。どうか宜しくお願いします。

青山富士夫(会報)、網島正嗣、小嶋源

四郎、鴨下武之、木村由紀雄、下山昌孝

(事務局)、富永長三(会計)、八谷進、湯川

由雄



◆「アイヌの生活に学べ」環境白書発表という夕刊(五月三〇日朝日)の見出しを見た。多少の意外感もあって、さっそく白書なるものを購入してみた◆総論編各論編合わせて九百ページの大部である。「アイヌの人々は川や海から得られる食物は神からの恵みと考え、ほかの生物の取り分も残しておくという習慣があった」と記事が引用するアイヌ民族の伝統的な文化への評価は総論の一部分に見られるだけで、アイヌに学べと見出しに言うほどのエネルギーは、通観してほとんど見受けることができなかった◆お役所の限界と云ってしまえばそれまでであるが、一方ではそのわずかな徴候に目をとめて、夕刊の大きな記事に仕上げた新聞記者の志には感銘するところがあった◆「先住民を差別するな」とはよく言われるが、それだけでは消極的である。そのすぐれた文化伝統を、社会全体のものとして受け継いでこそ、真の差別解消につながるのではなからうか。◆アメリカで野茂投手が活躍する。経済摩擦のさ中でさえ、かの国ではそれを大リーグの野茂として、アメリカ文化の中の野茂として声援を送っている。多元史観を常識としている社会の懐の深さを感じる。(匙)

◎投稿歓迎 会員の皆様のお声をお待ちしています。〒151渋谷区本町1-7-16

1102 「多元」編集室 青山富士夫

TEL 03 (3377) 7800

## 多元の会 カレンダー

8月

6日(日) 午後1時 文京区民センター  
発表と懇談の会 話題提供下山昌孝氏  
「青森遺跡の旅から見えてきた事」

20日(日) 午後1時30分  
シビックホール(文京区役所)  
中小路駿逸氏講演会「新・古代学の景  
観一万葉・宮室・大古墳」参加費  
1000円

20日(日) 午後5時 文京区民センター  
中小路氏を囲む懇談会 参加費1500  
円夕食付

27日(日) 午後1時 文京区民センター  
万葉集と漢文を読む会 万葉集は巻第  
十四「東歌」相聞歌の部を、また漢文  
は「梁書」倭伝を読み進めています。

9月

3日(日) 午後1時 文京区民センター  
発表と懇談の会 話題提供青山富士夫  
氏「人麿の運命撮影記」

10日(日) 午後1時30分 文京区民セン  
ター  
山田宗睦・日本書紀講座

24日(日) 午後1時 文京区民センター  
万葉集と漢文を読む会

29日(金) 午後6時 文京区民センター  
古田武彦ゼミナール

●当会への連絡は、会長/高田かつ子TEL 0448(8881)9111 事務局/下山昌孝TEL 044(5222)4185まで